

妊娠・出産体験に着目した子育て支援のあり方

—「豊かな出産体験」研究の可能性—

松本亜紀（倫理研究所専門研究員）

出産を重くする第一の原因は、恐れるということです。なぜ恐れるかと申しますと、苦痛があると思うからです。苦しみが無く、かえって楽しいのですから何の恐れるわけもないのです。

「豊かな力でとび出す」といった言葉が当たるほど、はっきりした力で、何ら痛みもなく苦しみもなく生まれてしまいます。ただ一度にですよ。ちょうど桃太郎さんが、大きい桃の中からはっという間に飛びだしたように。

（丸山敏雄『無痛安産の書』）

はじめに—問題関心と本稿の目的—

日本の少子化に歯止めがかからない。厚生労働省の発表によれば、平成 25（2013）年の年間出生数は 103 万 1000 人（推計）で前年度に比して 6000 人減、これは戦後最少を更新する数字である。

国家的な危機を招きかねない少子化の流れを変えることは喫緊の課題であり、わが国の子育て支援策は平成 2（1990）年の「1.57 ショック」をきっかけに内容を多様化し、少子化対策を中心とした施策は今日まで展開されてきた。にもかかわらず、合計特殊出生率（一人の女性が生涯に産む子供の数）は下降する一方で、平成 24（2012）年は 1.41 であり、少子化対策が功を奏していない。

なぜ、女性は子供を産まなくなったのか。この問題を考えるにあたり、筆者は女性の妊娠・出産体験がその後の育児に及ぼす影響に着目する。後述するように、これまで展開されてきた子育て支援策は、経済的な支援や育児と労働の両立といった環境整備を中心とした産後の支援に重点が置かれていた。それは、子育てはストレスを抱えるような負担である、という前提のもと、母親の育児不安やストレスを軽減することを目的とした子育ての社会化を促進する議論の展開に象徴されている。

だが、リスクや負担を前提に子育て支援の議論を重ねたところで、実際に産み育てる女性の出産意欲が高まらない限り、出生率の上昇は望めない。リスクや負担を前提とする現代の子育て支援策は、子供の視点や育ちに対する配慮が欠如しており、実際に子どもを産み育てる当事者である女性の立場に寄り添ったものとは言い難いのである。

本稿の目的は、時代や文化に左右されない人間の生のありようとしての〈子産み・子育て〉を考えることにある。そのための切り口として、従来の子育て支援策の問題点を指摘し、妊娠・出産体験がその後の育児に及ぼす影響を考えることで、従来の支援策とは異なる視点を提供したい。